安楽寺寺報

聞光

第６８号
歓喜会号
2013/8/15

発行所
〒737-0054
呉市上山田町2-28
安楽寺
TEL0823-21-7561

仏に救われるということ

信楽峻麿

真宗の教えとは、お念仏をもうして、仏さまに救われていくということですが、その仏に救われるとは、どういうことを意味するのでしょうか。

「すくう」ということの意味は、いろいろとあります。金魚をすくう、味噌汁をすくうという場合の「すくう」とは、「掬う」という字を書きますが、この漢字は「手へん」に「匊」（あつめる）という字を書きます。菊という字はそこから生まれたもので、菊の花は、すべて花べんが、中央に向って集まっているところから、そのようにあらわしたわけで、掬うとは、集めるということを意味します。

また「救う」という字もありますが、この字は、「へん」（偏）の「求」は、皮袋に水を入れた形をあらわして、その水がこぼれないように、しっかりと止めるということを意味し、その「攵」（旁）の「攵」は、人間の動作を意味して、しっかりと止めるということをあらわします。救急車とは、怪我や病気が、それ以上に進向しないように、しっかりと止めて、急いで病院に運ぶ車のことです。

また「援う」という字もありますが、これも「手へん」で旁（つくり）の「爰」とは、もともとは「耑」のように書いて、喧嘩をしている双方の間に入って、手をひろげて止める形をあらわした字で、争いごとを解決することを意味します。

また「済う」（すくう）という字もあります。この字の旁（つくり）は、正しくは、齊と書きますが、この字は、中国の古い辞典によりますと、娘が嫁入りをする時に、髪を美しく整え、いろいろな簪（かんざし）で、飾った後姿をあらわしたものだそうです。だからこの斉は「ととのえる」と訓みます。いまはそれに「さんずい」がついていますから、水を整えること、すなわち、水に沈むことなく、水を渡っていくことをあらわします。仏教では、仏さまに救われることを「済度」（さいど）にあづかるといいますが、その「度」も、「さんずい」をつけたら、水を渡っていくことですが、「さんずい」がない時には、道をわたる、谷をわたることをいいます。かくして、この済度とは、よく「わたっていく」ことで、仏さまのお救いのことをいいます。

すなわち、仏に救われるということは、自分の人生において、いかなる苦難にあい、どれほど深い悲しみにおそわれようとも、その苦しみ、悲しみを、よく受けとめ、それをよく超え渡っていけるような人間に、しっかりとお育ていただくということをいうのです。

この「済度」とは、インドの経典の言葉にかえしますと、「ウッタラナ」といいますが、それは「横切る」「超える」ということをあらわします。だから真宗において、阿弥陀仏のお救いをいただくということは、それぞれの人生のきびしい山や谷を、力強く超えていく、渡っていくということを意味するわけです。

真宗では、死んでいくことを「往生」といいますが、往生とは、往（い）って新しく生まれること、新しい仏の人生を生きていくということです。このこともまた、死を渡っていくことをいうわけで、往生とは終りを意味するのではなく、新しく仏の「いのち」をいただいたものが、仏の人生をスタートすることをいうわけです。

第５回夏の集い

8月2日、第5回の夏の集いを開催いたしました。当日は雨が降ったりやんだりで、悩ましいお天気でしたが、夜はそのお天気も安定して、とても楽しい夏の集いとなりました。

今回は、コールスガンティという混声合唱団18名にお越し頂き、仏教讃歌を歌って頂きました。それぞれのパートのきれいな歌声がハーモニーを奏で、すばらしい夏の集いになりました。後のビアガーデンにも残って頂き、いっしょに杯を傾けました。「コールスガンティは夜はアルコールスガンティになります」とリーダーが言われた通りで、アルコールがまわると、外でも3曲ご披露下さいました。それがまたすばらしく、自然と手が合わさる歌声でした。アルコールは喉の血行を良くするのだそうです。

今回ご参加頂けなかった皆様には、是非次回ご参加下さい。

注意　振り込め詐欺が多発！

私たちの周りでも、たくさんの振り込め詐欺が起きています。

７月に入って、呉署管内の報告で詐欺事件、あるいは未遂事件の報告が9件ありました。警察で把握できているだけで、この件数ですので、警察に報告がないものや、被害に遭った自覚のないものも、含めれば、もっと多くの被害があるのではないかと思います。

近頃の手口として、還付金詐欺が多いのと、詐欺の電話の後に、警察を名乗る男から電話が入り、現行犯逮捕したいので金を渡してほしいと捜査協力をさせる形で、お金をだまし取るそうです。どんどんと手口が巧妙化しています。その手の電話には十分お気をつけください。

安楽寺マンガ通信

その２１　信楽めぐみ作

聞思　いのちを伝える

信楽晃仁

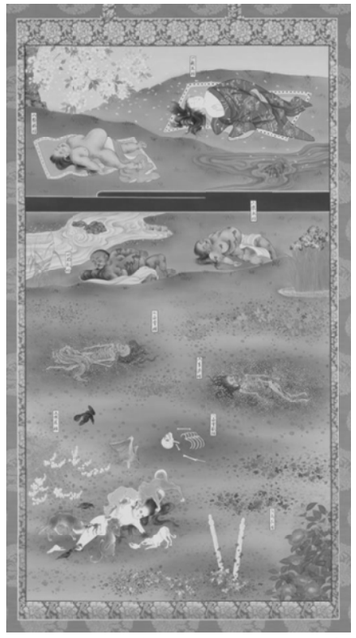
呉を象徴する灰ヶ峰で痛ましい事件がおこりました。十六歳の少女が殺害され遺棄されるという事件です。二十一歳の男性を含む十六歳の男女七名が一人の少女を暴行し殺害して灰ヶ峰山中に捨てました。なぜこのようなことになるのか、誰も止めることは出来なかったのか。子ども達の心の闇を思われずにはおれません。

この度この事件から気づかせてもらったことがあります。

もうすぐ迎えるお盆は盂蘭盆経というお経が元になっています。目連尊者と、亡母の物語ですが、日本ではすでに千数百年の間、この行事が勤められてきました。こうした行事はあるテーマを元に問題提起をしつつ勤められていくものだと思います。それが千数百年ですから、それほど重いテーマだと思います。お盆には先祖を考えることや、あるいは餓鬼道に落ちた母から、人間が生きるということを考えたり、あるいは迎え火送り火や、「地獄の釜のふたが開く」とかいった言い伝えなどとも重なり、そうしたお盆の風物詩は何を表してきたか。それを思うのです。

その中で、つづまるところ、このお盆は何を伝えてきたかといえば、「いのち」だと思うのです。先祖のいのち、私のいのち、あるいは様々なもののいのち。否、お盆だけではなく、仏教は全ていのちを伝えんがための教えなのです。

この度の灰ヶ峰の事件だけでなく、今までもいくつか、そうした若年による犯罪がありました。一番に思い出すのは、やはり神戸の連続児童殺傷事件ではないかと思います。神戸の少年が、小学生女の子を金槌で殺害し、その後小学生の男の子を殺し、その首を切って中学校の正門へ置きました。その後この少年の供述の中から見えてきたものは、大好きなおばあちゃんが亡くなったときから、動物の殺傷が始まり、少年は「僕からお祖母ちゃんを奪い取ったものは死というものであり、僕にとって、死とは一体何なのかという疑問が湧いてきた」といって生き物を殺し、猫を殺し、そして最後には人間を殺し、身体の中から「死というもの」を、そして「いのち」を探し出そうとしたようです。



その事件に慌てた教育関係者は、子ども達がいのちがわからなくなっているといって「いのちの教育」「生きる力」といのちや、生命を伝えようとしました。ところがその努力もむなしく、また事件がおこりました。長崎で二件。一つは中学生が幼児を誘拐し、パーキングビルの屋上から地面へ落として殺害。もう一つは小学六年生の女児が、学校で同級生の首をカッターナイフで切って殺害。その小学校六年生の女児は後に自ら殺害した女児に「会って謝りたい」と言っています。長崎の教育関係者は慌てました。そしてこれは「いのちの教育」「生きる力」の教育ではいのちは伝えられないのではないかという疑問を持ったのです。そこで長崎では、いのちの教育ではなく「死の教育」が必要なのではないかと気づきました。ＮＨＫがある小学校でその死の教育をする模様を特集して放送しました。そして最後の授業で先生が「みんなは自分が死んだらどうなると思うか」と問うのです。すると三十三人のクラスで、二十八名が「また生き返ると思う」と。これは大変な問題を残しました。びっくりした先生はこれを家庭に伝え、家庭でもこの死について、いのちについて話し合って欲しいと伝える場面がありました。

この子ども達の言葉を聞いて気づいたのは、「いのち」は死を見ないものには感知できないものであり、死によって初めて見えていくるのが「いのち」だという事です。

この度の灰ヶ峰の事件は十六歳の主犯格の少女の自首によって発覚しました。自首がなければわからないままだったかも知れません。なぜ自首したかといえば、その少女が殺害現場に帰り、その被害者の死を見たからです。

九相図というものがあります。仏教がいのちを考え、肉体への執着を断つ行にも活用されたもので、人間のいのち、そして身体がどうなっていくのかを九幅の絵で表しています。女性の死体が放置される中で、腐り、白骨化していく過程です。

この少女がなぜ母親に相談し、他の友達との約束を破り、またみんなの罪を全てかぶってでも、自首しようとしたのか。それは死を見たからです。死を見たからいのちが見え、自らの罪が見えたのです。

自分が殺す時には見えないんです。血が出て、顔が腫れても。怒りの心地獄の心、鬼の心の方が勝って、そこにある死という事実が見えないんです。しかしその身体が崩れ、白骨化していく中で、本当のいのちが見えてくる。白骨の御文章が今の今まで読まれ続けていくのは、その死の現実と共にいのちを伝える真の言葉だからです。

子どもだから見えないのではありません。四番を嫌い、病院も四号室をなくし、とにかく死と同じ音の４という数字まで嫌う大人もこの子達と同じです。いのちが見えていません。仏教はずっと死をテーマに行事を行ってきました。法事、命日、彼岸、報恩講、お盆、葬式、上げればきりがありません。全て表面上は死がテーマですが、仏教はそこからしかたどりつけない「いのち」を、私たちに伝え続けているのです。

安楽寺の地獄絵図を見てください。地獄のテーマは殺生です。この世でいのちを殺したものが地獄へ行くのです。地獄は、いのちをいのちと感じられない世界です。切り刻み、たたきつぶし、焼いて、煮て、いのちとは思っていない鬼は躊躇なくなんでも出来ます。それは誰のことでしょうか。また地獄には死がありません。八大地獄中一番楽な等活地獄で死がないと書かれています。切り刻まれ、叩きつぶされ、亡者は死んだ方がましだと思うのです。しかしやっと死ねると思う時、鬼が「カツカツ」というとまた生き返り、また最初から切り刻まれ、叩きつぶされるのです。地獄は死がない世界です。

今私たちの日常は四という数字までふれないほど、死を見なくなりました。自分の殺したいのちへも目を向けず、「いただきます」と手を合わせることもできなくなり、どこを見ても私たちの日常に死はありません。だから「いのち」がわからないのです。そんな私たちに、このいのちがどこへ向かうのか、わかるはずがありません。

この度の灰ヶ峰の事件は、この子達だけの問題ではありません。家庭の問題であり、社会の問題であり、私たちの問題なのです。

法事を勤め、命日を勤め、仏壇を安置し、現代人はめんどくさいとしか思えないことが実は一番大切なのです。このことこそが、地獄を離れることが出来る道なのですから。

安楽寺法要案内

九月	彼岸会	前々住職 西王地唯信二十五回忌 前々坊守 柳父サハノ二十五回忌 前 坊 守 信楽美代子　三 回 忌 日時　９月１５日(日)朝席・昼席 講師　大阪　如来寺　釋徹宗師 講題　老病死と向き合う
十月	顕真・永代経	日時　10月12日(土)朝席・昼席 講師　東広島　明宝寺　藤井晃師 講題　「法事はなんのために するのですか」
十一月	報恩講	日時　11月16日(土)・17日(日) 両日とも朝席・昼席 講師　信楽峻麿前住職 講題　「念仏の利益」
十二月	成道会	日時　12月14日(土)　朝席・昼席 講師　豊栄　教円寺　信楽和宏師 講題　「お浄土に生きる」 ～お念仏の生活～

第６８号　聞光　2013年8月15日